

No.4000176

婦人科がんの新規治療法開発とがん予防推進の社会的活動-予後とQOL向上を目指して-

Development of Novel Therapeutics of Gynecological Cancer and Social Activities for Cancer Prevention: Toward Improvement of Survival and QOL for Women with Gynecological Cancer

小西 郁生¹

¹独立行政法人国立病院機構京都医療センター 院長

わが国では、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん等の婦人科がんが近年いずれも増加傾向にある。これら婦人科がんをもつ女性の予後とQuality of Lifeの向上を目指し、その発生・進展の多様性に注目した分子病理学的研究および包括的ゲノム解析を行い、新規治療法の開発を推進した。さらに、がん発生の自然史に基づく検診の普及と発症予防のための社会的活動、JCOG婦人科グループでの活動、およびアジア婦人科腫瘍学会(ASGO)での役割を含む国際的活動を行った。

まず子宮頸がんについては、その発症原因であるヒトパピローマウイルス(HPV)感染の基礎的研究を行うとともに、がん検診の普及およびHPVワクチン接種の導入に尽力し、有害事象としての慢性疼痛や運動障害が注目されて以来、全国における副反応診療体制構築と診療マニュアル作成に貢献した。また、早期子宮頸がんの妊孕能温存手術である広汎子宮頸部摘出術の普及とともに、進行子宮頸がんに対するネオアジュバント化学療法+手術療法の確立、骨盤除臓術など拡大手術の再評価に努めた。子宮体がん発生の分子機序を2つのタイプに分類して解析し、タイプ 体がんにおけるエストロゲン依存性細胞増殖機序に関する研究を行い、予後不良のタイプ 体がんのゲノム解析からドライバーであるSTAT1 経路を明らかにした。

婦人科がんのうち最も予後不良の卵巣がんの研究をライフワークとして取り組み、発生過程の自然史の多様性を多施設共同研究により明らかにした。すなわち、漿液性癌では発症の見逃しを疑われ医師が提訴された事例で早期発見困難の科学的根拠を提供した。一方、子宮内膜症性嚢胞から発生する明細胞癌では、その自然史や画像所見から早期発見の可能性を示し、包括的ゲノム発現解析により新たな分子標的治療の有用性を示した。さらに、腹腔内播種性転移の分子機序の解析に基づいて、抗PD-1抗体を用いた免疫療法の医師主導臨床試験を初めて遂行し、その安全性と有効性を示し、再発卵巣がん患者に希望を与えた。

なお、本講演では主として、わが国における子宮頸がん撲滅の方向性を提示したい。